

日本の BBOYING と HIPHOP 文化

木村 真也

(西村俊範ゼミ)

〔目次〕

『ブレイクダンスの正式名称』

『HIPHOP とは』

「HIPHOP の歴史」

「アフリカン・バンバーター」

『BBOYING について』

「誕生」

「衰退」

「隆盛」

「二度目の衰退」

「二度目の隆盛」

「現在の BBOYING」

「BBOY の B」

「BBOY のファッション」

『日本での B-boying』

『研究の結果と感想』

この卒業研究は、日本でブレイクダンスとよばれるストリートダンスの一つを研究し、まとめたものである。近年ストリートダンスが義務教育化され、メディア等にも注目され人の目に入ることも多くなった今、正しい情報と歴史を知りこのダンスについて正しい理解を定めることを目的とする。

また日本にきてまだ日も浅いことから資料が極端に少なく、ブレイクダンスについて信頼できる情報がのせられている書籍は日本には存在しないのが現状である。そこで雑誌にのっているブレイクダンスのパイオニア的存在である海外ダンサーのインタビューや公式サイトなどをこの卒業研究では資料としている。

『ブレイクダンスの正式名称』

まずはじめに基礎知識としてブレイクダンスの本当の名前を知る必要がある。

ブレイクダンスの正式名称は BBOYING とよばれ、今現在日本に定着してしまっているブレイクダンスという呼び方は、マスメディアが勝手に付けてそれがそのまま広がった名前である。

『HIPHOP とは』

さてつぎに BBOYING を知る前に「HIPHOP とは何か」ということを知るべきだと思う。

一般に HIPHOP と聞くとダンスのジャンルや音楽のジャンルをイメージしがちだが HIPHOP とは文化の名称である。その文化の中には4つの要素が存在し、その要素とは「RAP」「GRAFFITI」「DJ」そして「BBOYING」である。

「Rap」とは、音楽のビートに乗せながらなめらかかつ分かりにくく言葉を連射するものであり、時には、社会風刺や反戦、人種差別をテーマにするものもある。

「DJ」とは、塩化ビニールのレコード盤を操りバックトラックを使いながら、レコード盤を針で擦りあげノイズを利用しビートを刻み込んでそれを音楽にするものである。

「GRAFFITI」とは、車両や壁などに巨大な絵をスプレーなどを使い一夜にして描くものである。そして最後の「BBOYING」とは、音楽にのり身体全体を駆使し、身体を回転させたり激しい動きをしながら、自己表現するものである。

これら4つの要素に共通していることは速さと危険さをとまなうことである。HIPHOP 文化が誕生する前、犯罪や殺人などが日常化した治安の悪い環境で生きることにならざるを得ない力が必要とした彼らにとっては、他の人よりも早く、強くなければいけなかった。日常化した暴力や犯罪に疑問を抱いたゲッターに住む黒人の若者達が、暴力とはまた違った形で自己表現・自己主張をするために生まれた文化であった。

「HIPHOPの歴史」

ではなぜこのようなHIPHOPが生まれたのであろうか。その背景にはアメリカに古くからある黒人差別が大きく関係している。

17世紀初めに、ヨーロッパで、黒人の奴隷貿易が始まった。ヨーロッパ諸国は新しく発見したアメリカ大陸を開拓するために、アフリカから沢山の黒人奴隷を輸入したのである。その当時、黒人奴隷は「人」ではなく「物」として扱われており、「奴隷はお金で買うもの」という認識がなされていた。1860年のアメリカ合衆国国勢調査では、合衆国総人口の約14%の黒人人口のうち、約89%が奴隷だという調査結果があったほど「黒人＝奴隷」の認識は根強いものであった。アメリカ南北戦争中の1863年にリンカーン大統領が出した「奴隷解放宣言」により、南部の黒人奴隷達に対して自由が保障されたが、奴隷解放宣言が発表された後に彼らに待ち受けていたのが「人種差別」であった。黒人というだけで就職はおろか、経済活動、教育、生活面などありとあらゆる面で制限を受けていた。その後も奴隷としてアメリカに連れてこられ、そのまま定住した黒人への差別は続いたが、キング牧師(Martin Luther King, Jr.)が生涯人種の平等を説き続け、1964年ようやく法律上の差別は全て撤廃されたのであった。

しかし、人々の間では日本の部落差別の様に黒人差別が根強く残り、その後も水面下での差別は続き、今でも一部の地区では差別が残っている。

そのような厳しい時代の中で黒人の心は荒んでいきギャングとなり、略奪や縄張り争いなどで殺し合いが頻発し若い命が次々と失われていった。

しかし、この無意味な殺し合いに疑問を抱き始めたギャングが次第と増え、この殺し合いに向けたエネルギーを違う方向に向けられないかと考え始めた。これが「HIPHOP」誕生への第1歩であった。ここで誤解をしないで頂きたいのが、「HIPHOP」とは”で記述した4つの要素は「HIPHOP」という枠が出来てから誕生した訳ではなく、各々で形成されつつあった各要素を「HIPHOP」の教祖と呼ばれる「アフリカン・バンバーター」が一つの文化にまとめ、HIPHOPと名付けたということである。

「アフリカン・バンバーター」

HIPHOPを語る上で絶対に避けては通れない人物が、「アフリカン・バンバーター」である。彼はHIPHOPの教祖と言われており、HIPHOP史上でのキーパーソンの一人である。彼は1969年にブロンクス・リヴァー支部でブラック・スペースという組織の中にいた。その後、ブラック・スペースはブロンクス最大規模のストリート・ギャング組織へと発展し、アフリカン・バンバーターは生来の性質からかその指導者になるのであるが、それは1974年にはばらばらに分解していったのである。その理由についてバンバーター自身は「ドラッグに走った連中もいたし、他のギャングに消された連中もいた。警察との衝突も酷かったし、女の子がまず疲れてしまった。」と語っている。

多くの大切な人を失い暴力に嫌気がさした彼は、殺し合いなどに向けられたエネルギーを良い方向に導くため、自らのルーツであるアフリカを訪れた、そしてそこで暮らす黒人の文化を体験し、現地の民族の結束の強さに影響を受け、その概念を生かそうと決め帰国したのである。

帰国後まもなく彼は、5人の友人と共にZulu Kings (Zulu Nation)という組織を作り上げた。それは、従来のストリート・ギャングとは異なり、暴力の代わりに音楽やダンスに興味を注ぎ、無意味な殺し合いに向けたエネルギーを違う方向に向けた組織であった。Zulu Nation 公式ホームページによると、Zulu Nationの公式誕生日は1973年11月12日であると記されている。

Zulu Nationを作ったバンバーターは、その後ブロンクスでDJをしながら、ばらばらに散らばっていたB-boyやDJなどを一つの文化に束ねて人々を組織し始めた。

これがHIPHOP誕生の瞬間であった。

HIPHOPが始まった時は当然、黒人の若者達は誰にBBOYINGを教わったわけでもなく、GRAFFITI WRITINGのお手本があったわけでもなかった。社会の底辺にいた無教養な彼らが文化の担い手となり、自ら作り上げ発展させたのである。

また、バンバーターは「自分たちがHIPHOP

を作ったときに、これがPeace（平和）Love（愛）Unity（団結）そしてHavingFun（楽しみ）となることを願い、HIPHOPによって人々がストリートにはびこる問題（ギャングによる暴力、薬物乱用、アフリカ系とイタリア系のあいだでの抗争）から遠ざかることができるようにと願った。そしてHIPHOPを通じて認識、知識、知恵、理解力、自由、正義、平等、平和、愛、尊厳、統一、楽しむこととその責任、挑戦と達成、経済、数学、科学、生命、真実、事実と信頼を学ぶことができると述べている。

ドキュメンタリー映画「The Freshest Kids」の中でも、「HIPHOPは人種の壁を越えたイデオロギーだ」と語っている。またHIPHOPが誕生してからというもの、犯罪へのエネルギーが有り余った若者だけでなく、荒れ廃れた貧しい地域（ゲットー）に住みジムや運動も習うことができない幼い子どもたちにとっても、唯一希望を持てるものであり家や学校での規則に縛られたストレスを発散するはけ口にもなった。そして犯罪へのエネルギーやストレスを発散させるには、技術が簡単に習得できるような文化ではなく、習得が難しく毎日の練習や考察が不可欠な文化が必要であった。ドキュメンタリー映画“BREAKIN’ COLLECTION SPECIAL FEATURES”では「HIPHOPの基礎は練習である」と言われており、「HIPHOPでは身に付けたスキルを競い合うバトルが重要だ」とも言われている。HIPHOP誕生以後、暴力の拳やナイフ、銃器を、音楽やダンス、GRAFFITIに置き換えたことで、“バトル”に勝つためスキルを習得することにエネルギーが向けられ、犯罪へのエネルギーをHIPHOPに向けることができたのである。

『BBOYINGについて』

さてHIPHOPの中の一要素であるBBOYING。これがどういうものであるのか。

映画「The Freshest Kids」によると、BBOYINGとは手足だけでなく体のあらゆる部分を動かし、頭脳や個性をも駆使する究極のダンスであると言われ、その様は「もはや流行を超えた一つの芸術である」と言われている。日々発展してきたBBOYINGは今現在大きく四つのカテゴリーで構

成されている。

一つ目はTOPROCKと呼ばれる、立ってステップを行い相手を挑発する動きである。

二つ目はFOOTWORKと呼ばれ、手を地面について腰から下を使って円を描く動きである。三つ目はFREEZと呼ばれる、Top RockやFootwork、Power Moveの動きを瞬間的に止める（凍結する）動きである。

そして最後の4つ目はPOWERMOVEという全身を使って豪快に回転する動きのことである。

しかしこの様に分けられているBBOYINGであるが、決まった動きや形をしなければならないという決まりは無く、逆に誰もが考え出すことが出来ないオリジナリティのある動きを追及していることが評価されている。それは今現在まで進化してきたBBOYINGが人間が肉体的に進化できる限度にまで発展してしまい、その結果多くのBBOYが似たような動きになってしまったからであると考えられる。

『誕生』

ダンス雑誌“DANCE DELIGHT”によると、『誰が始めたのかは明確に記録されていない、このBBOYINGが生まれたニューヨークサウスブロンクス地区で、それらしき踊りが現れ始めたのが1970年代前半。ジュームスブラウンのヒット曲Good FootにちなんでつけられたGood Footと呼ばれる踊りがその走りと言われる。この頃は、足だけを使うシンプルなフリースタイルの踊りであった。その後この踊りが進化しこれに手を使って地面で体を支えながら踊るものが現れはじめFootworkのスタイルが生まれた。

その後BBOYINGは大きな広がりを見せることとなる。これにはDJ Kool Hercの存在が大きかった。彼はアフリカン・バンパーターと並び、“HIPHOPの父”などと呼ばれている。何故ハークがHIPHOPの父となったか。それはハークがBreakbeatsという概念を思いついたからであった。映画「The Freshest Kids」によると、「ハークが流す音楽はいつもBreakが利いていて、そこはBreakbeatsと呼ばれた。音楽というよりむしろ延々とビートが鳴り響いているといったものであったが、ハークはものすごく高揚感のあ

日本のBBOYINGとHIPHOP文化

るビートを流し、集まった連中は夢中になって踊っていた。だからハークはみんなが盛り上がるBreakbeatsを引き延ばすために同じレコードを2枚使った」とある。ハークは初めて同じレコードを2枚同時にかけ、ある特定の部分を引き延ばすということを思いついた人物であった。ハークのPartyには、自然発生的にダンサー達が集まるようになり、彼らは新しいステップを考え出すのに夢中になっていたのであった。

映画「The Freshest Kids」によると、「新しいダンスが生まれるとみんなが取り入れるが、その熱は時間とともに冷め、それは一部の人間だけのものとなる。踊れる奴は色々なポーズをきめ、かっこよく踊るうちに周りに人が集まり対抗してくる奴も現れる。その集まった人の中にNigger Twinsがいた。床で踊るBBOYは1975年頃に現れ、その後ブームは始まった。この頃にはBBOYINGの第一世代と呼ばれるNigger Twinsに、SPY、TRAC 2、そしてJOJOやジミー・DなどのBBOYたちが登場し、今あるBBOYINGの動きの基礎を築いた」とあり、さらに「知られていなかったBBOYINGは1975年頃、DJ Kool Hercによって広まり、その結果多くの知られていないダンスがストリートに顔を出した。ダンスが次々と紹介されると他の人種にも飛び火し、ヒスパニックなどの黒人以外の人種も踊るようになった」とある。この世代のBBOYINGにはまだウインドミルやヘッドスピンといった体ごと回転するPower MoveはなくFootworkとToprockが中心であったが、プエルトリコ系のBBOYが初めて背中で踊ったことにより、その動きの可能性はさらに広がった。こうしてハークによるBreakbeatsと第一世代のBBOY達によって発展したBBOYINGは、1970年代後半、ようやく一つの文化として確立されたのであった。

「衰退」

しかし、BBOYINGも70年後半頃から黒人の間ではその人気を失いつつあった。DISCOブームの到来である。映画「The Freshest Kids」の中では、「79年になると周囲から時代遅れだと言われた」、「79年にはニューヨークマンハッタンのBBOYは犯罪に走ったり、定職に就いたり

ですっかり影を潜めていた」と述べられている程であった。しかし、そんな中でも変わらずにBBOYINGを続けたBBOYがいたのであった。その中に伝説的なBBOYINGチームの「Rock steady crew」を設立した、JIMY・DとJOJOがいた。

彼らはBBOYINGのブームが終わったと言われ始めた1977年に、変わらず(Steady)に踊り続けることを目的として“Rock steady crew(以下RSC)”を結成した。その後、1979年にJOJOとJIMY・DはRSCを新たな次の段階に持っていくためにCRAZY LEGS達をメンバーとして加えたのであった。彼らは意欲的に活動しマンハッタン支部をはじめとし、各地に支部を作った。RSCの転機は1981年、人々がCrazy-Legs、Ken Swift達のマンハッタンでの活動に気がつき始めたことだった。

1981年8月、写真家であり彫刻家であるHenry ChalfantがRSCにリンカーン・センターでの野外公演への出演のチャンスを与えた。マンハッタンを騒然とさせるバトルをしたいと思ったCrazy-Legsは、この公演でRSCのライバルであるDynamic Rockersとバトルをするというものだったが、これはその後のRSCにとって決定的なものとなった。なぜならば、この公演は雑誌の表紙を飾り、新聞に取り上げられ、そして地元TV局で報道されたからであった。これをきっかけにRSCは世界中のマスコミにとりあげられた。

RSCの活動が、時代遅れと思われていたBBOYINGを再び隆盛させるきっかけとなったのであった。

「隆盛」

RSCの活躍をテレビで見たかつてのBBOY達は、これをきっかけに再びBBOYINGを始めた。リンカーン・センターでのバトル以降、メディアの中心であるニューヨークはHIPHOPに注目し、こぞって雑誌や新聞に記事を取り上げ、HIPHOPに火をつけたのであった。BBOY達はプエルトリコ系のBBOYが生み出したウインドミル、ヘッドスピン、ハンドスピンといったアクロバティックな要素を取り入れ、それをさらに発展させた。彼らはBBOYINGの第二世代と呼ば

れ、Footwork が中心だった BBOYING をさらに広げていったのである。DANCE DELIGHT によると、「それぞれの Power Move は、色々なところから取り入れられたと言われる。カンフーの起き上がる動きを連続することで生まれたウインドミル、ヘッドスピンはアフリカの民族ダンスに、エルボースピンはロシアンダンスにルーツがあるといわれている」。

1982 年、この波に乗るかのようになり初の HIPHOP 映画と呼ばれる「WILDSTYLE」が制作され、RSC が出演した。しかし、BBOYING が全米だけでなく、世界的に知られるようになったのは同年 1982 年公開された「Flashdance」(RSC 出演) で取り上げられた時であった。それはごく数十秒のものであったが、その衝撃はかなりのもので世界中に影響を及ぼした。

「Flashdance」で一部の地域から世界中に広がった BBOYING は、もちろんアメリカの西海岸にも広まった。これに刺激を受けた西海岸の若者達は BBOYING を始め、当初は NY に比べ遅れを取っていたが、独自のスピンや動きを取り入れ高度なスピントクニックを築き上げていった。

リンカーン・センターでのバトル、New York City Breakers の他のチームには無いほど過度なメディア露出、そして映画「Flashdance」公開により、BBOYING はアメリカ全土で一躍社会現象となり BBOY が爆発的に増えた。「Flashdance」以後、「Beat Street」など BBOYING や STREET DANCE の映画が次々と作られ、その熱はますますヒートアップしていった。1984 年にはロサンゼルスオリンピックのなかのショーの一つに出演し、ブームとなり、B-BOY が増加した。

「二度目の衰退」

BBOYING は街の至る所で目にするのができ、電車の中で踊っている子どもが出てくるほどであった。そのため様々な練習場所で怪我が発生する事故などが起こり始め、警察や役人が社会の迷惑だとしてダンスを禁じるようになった。メディアや企業などはビジネスとして利用し、稼いだ後は手の平を返したかのように背中を向けたのであった。

「The Freshest Kids」の中で、RSC の Crazy-

Legs が「ゲットー出身の金に困った若者がどん底の状態から突然世の中で成功し仲間とともに大金を手にする。ところがすぐに状況は暗転、状況は最悪だった。」と述べるほどそのブームは一気に冷めていった。

こうして 1980 年代前半のアメリカにおける BBOYING の過度なメディア登場は、85 年以後、BBOYING がメディアへの露出が減少した時に、大衆に「BBOYING は単なる流行だったのだ」というイメージを持たせる結果を生んだ。クラブで BBOYING をやるものなら、時代遅れの目で見られ、多くの BBOY が姿を消した。多くの BBOY は再びギャングへと戻って行った。これが BBOYING 冬の時代である。

「二度目の隆盛」

その後すぐに RAP が流行り始めた。

RAP は購入した後自宅で簡単に聴くことが出来るため、企業は商品価値が高いものとして食いついたのであった。ここでメディアが HIPHOP = RAP として社会に流通させたために今現在も HIPHOP = RAP と勘違いする人が多くなってしまったと言えるだろう。

一人歩きしてしまった RAP 業界であったが、そんな中にも HIPHOP の本質を理解している人物がいた。KRSONE である。彼は少年時代に、DJ Kool Herc がブロンクスで流す音楽を自宅から聴いていた。言うなれば少年の頃から Breakbeats を耳にし、BBOYING の発展をその目で見えてきた人物であった。

そんな彼が HIPHOP の本質を理解することはたやすい事であったのだろう。

「The Freshest Kids」によると、「1991 年に KRSONE は自分達のイベント「Source Awards 1991」に RSC を出演させ、BBOY に新しい居場所を提供した。そこから全てが変わった」と述べられている。

さらに新世代の BBOY も頭角を現し始めた。新世代 BBOY はその独創性によってより複雑な動きやスピンを生み出し、BBOYING をさらに発展させた。

また「DANCE DELIGHT」によると、「こんな状況でも BRONX には本物があつた。真の

日本のBBOYINGとHIPHOP文化

BBOYたちは、世界中で根強くBBOYINGを続け、新たな時代の到来を待った。特にロサンゼルスやサンフランシスコなどの西海岸の都市、そしてヨーロッパでは、POWER MOVEの進化や新たなコンビネーションの発明が確実になされていた」とある。

これを受けて90年代始めにはロサンゼルスやサンフランシスコで後に「The Resurgence of BBOYING」と呼ばれるBBOYINGの復興ムーブメントが起こり始めた。このムーブメントは、ゆっくりではあったが着実に全米、そして全世界にひろがった。また同時期にヨーロッパでは、「Battle Of The Year」というイベントも始まった。

1992年にはRSCがついに正式に活動を再開。BBOY SummitやRSC Anniversary(1991～)といったイベントを開催し、世界中からBBOYが集まるようになった。こういったムーブメントは旧世代のBBOYが企画を手がけ、開催してきたことによって、新世代のBBOYはHIPHOPの本質的な部分に直接触れることができ、流行を越えた一つの文化として確実に根付いていったのであった。

「The Freshest Kids」には、「楽しむために参加したつもりであったが、あの場にいったことで自分をより理解できた。皆の話を聞くうちに自分の精神力とか、なぜニューヨーク(RSC Anniversary開催地)に来たのかとか色々わかってきた」と言われているほど、このムーブメントが与える影響は計り知れないものであった。

文化として確実に根付いたBBOYING(HIPHOP)は、KSCONEによってさらに大躍進する。彼はBBOY達を自らのミュージック・ビデオに出演させたのだ。これ以来BBOYINGは再び注目され、多くのRap Music Videoに取り入れられた。忘れられていたHIPHOPの神髄は彼の活躍で復活したのである。BBOY達は急に脚光を浴びて大物アーティストの作品にも出演した。この後、多くの若い世代が想像以上に熱中し、海外にも波が広がった。

BBOYINGのその動きは芸術とまで言われ、多くの人々にアートとして認められて行った。現在ではアメリカの正統派のダンス教室でもBBOYINGのクラスが設けられているところもある。

「バレエの様に技術の高いダンス」として評価されているのである。

【現在のBBOYING】

現在BBOYINGには大きくわけて2つのスタイルがある。一つは、フットワークとトップロックを主体とするスタイル、そしてもう一つは大技を主体とするパワーブレイキングである。前者はRSCが提唱するスタイルで、「BBOYINGは体操ではなくダンスであるのだから、音楽のリズムを大切にBBOYの個性を出していくべきだ」というコンセプトのもとに成り立っていると言える。そしてパワーブレイキングは、アクロバティックな技を磨くことに重点を置く。確かにダンサーの個性や、音楽に対する感性は、回ってしまうと出しにくいものがあるが、そのインパクトは強い。現在世界中のBBOYの間では、この2つのスタイルをめぐる論争が行われている。しかしここ最近ではパワーブレイキンとリズムブレイキンを高度なレベルで融合させたオールマイティブレイキンと呼ぶべきスタイルが主流なりつつあり、現在進行形で進化し続けている。

またRSCのメンバーであるkenswiftらによって作られた「クラシックスタイル」というプログラムでB-boyingの伝統を伝える運動が世界各地で行われている。

【B-boyのB】

BBOY(BGIRL)とは、正式名称「Break-boy(Break-girl)」の略であり、間違っても「Black-boy」や「Bad-boy」の略では無い。映画「The Freshest Kids」で、DJ Kool Hercは「“こいつらはイカれていて(Break)かなりヤバい野郎だ。Breakはそんな意味のスラングさ。BreakするBBOYは銃を乱射する代わりにイカれた踊りをする連中のことだ。レコードのBreakはその後生まれたもので、BREKIN'のBreakは「イカれた」が由来だ。そんな言い回しをダンスに当てはめたのがBreak-boyだ。その後Breakという単語を1文字に省略して出来たのがBBOYだ。」と述べている。

またBBOYINGが社会現象となった1980年代前半、世の中はBBOYに対して“Break Dancer”というプロの称号を与えた。これについて「The

Freshest Kids]では「本来の名前はBBOYである。その呼び方は変えたくない」と述べられている。そしてこれはある一説であるが、HIPHOPに精通してBBOYINGを踊っている人を「BBOY」、BBOYINGだけに限定して踊っている人を「BREAKER」と呼ぶと言われている。BBOYINGを作ってきた先人達は、「BBOY」という呼ばれ方に対して誇りを持っているのではないだろうか。

「BBOYのファッション」

現在数々のマスメディアの誤った情報により、ギャングの様なダボダボの服を着るファッションのことを「BBOY (B系とよばれる)」と解釈してしまっている人が多い、しかしHIPHOPが誕生した時から誰もがこんなダボダボなファッションをしているわけではなかった。パンツが大きいには理由があり、ゲッターに住む黒人家庭は、兄弟が多く、お金もなく新しいものを買うことができなかった。だから「上からのお下がり」ということで服を再利用していたためダボダボと大きい服を着ざるを得なかったのである。また、ドゥラグ(頭にかぶっている布、ネットのようなもの)も、今やこれもファッションとして定着しているが、元はアフロを押さえるためというところから始まった。

そしてあのゴツゴツしたアクセサリーについては、稼いだ金をゴールドやシルバーに変え、「見ろ、俺はこんなに稼いでるんだ」という自慢のようなものであった。

つまり自分が貧乏である様に人に見せないように努力し強さを誇示する心がBBOYの中では重要なのである。また、パンツの片足(左足)の裾をあげるというファッションにも由来があり、これももとは黒人が一昔前に良く行っていたスタイルであった。映画で銃やナイフを左足のふくらはぎに忍ばせる場面があり、そこから黒人が周囲に「俺は何も持っていない」とアピールするための行為であったと言われる。ピース(平和)をアピールしていたスタイルが、今現在のズボンの片足を捲り上げるというファッションとなったのである。

また他にBBOYは常にクリエイティブでいる

ことが求められており、それはダンスだけでなく服装にも表れている。BBOYINGができて間もないころ洋服のウエストのゴムを取って紐代わりにして靴紐を腰に巻きベルトにする人が表れた、それはそのまま当時のニューヨークの流行ファッションとなり、今現在pumaのスエードという靴の靴紐が太いのはそのファッションの影響である。他にも最近ではあまりみられないがカンフースリッパをはいて踊っていたものもあり、それは当時人気だったブルスリーなどのカンフー映画の影響である。その時代映画は1ドルで観れるものであったため、貧乏であったBBOYたちにとって貴重な娯楽の一つだった。日常で手に入る様々な情報からBBOYの美学を築いていったのである。

そしてこれらの服装は昔のテイストを残しながらも時代の変化とともに変わり続けている。

『日本でのBBOYING』

では日本に初めてBBOYINGが上陸したのはいつなのか。

1982年にアメリカで公開された映画「Flashdance」が1983年に日本で公開された。その「Flashdance」の中のごく数十秒のシーンに衝撃を受け、BBOYINGを始める若者が殺到したのであった。更に同年10月に映画「WILDSTYLE」の日本公開が決まった。「WILDSTYLE」でのプロモーションの一環として多くのHIPHOPアーティストが来日し、その中にはあのCRAZY LEGS率いるRSCもいた。RSCは池袋のパルコでパフォーマンスを行い、これが日本で初めて生のBBOYINGを目にすることが出来た瞬間であった。

これらが日本にBBOYINGを大きく浸透させるきっかけになったと言われているが、ホームページPhot Soulでは、原宿にはそれ以前から既にBBOYINGが踊られていたと書かれている。

ディスコブームが終焉を迎えつつある中、多くのダンサーが原宿の歩行者天国にダンボールを持って練習に来るようになった。

2つの映画が公開された後、原宿に集まっていたBBOY達はチームを組んだりしながら各々のスキルを磨いていた。1986年頃には原宿、横浜

日本のBBOYINGとHIPHOP文化

などで「ファンキージャム」、「東京BBOYS」、「フロアマスターズ」、「B-BOP CREW」などの代表的なチームが現れ始めた。

「ROOTS OF STREET DANCE」の中で「1987年になるとBBOYING自体が一般の人にとって敷居の低いものではなかったし、踊っている人たちの間でも出来る人と出来ない人の差が極端に激しくなったこともあり、多くの人が辞めていった」とあるように、BBOYINGの勢いは急速に衰えたのである。さらに決定的となったのは、1988年後半から1989年にかけて日本に新しくNEW JACK SWINGというジャンルのダンスが入ってきたことである。これによりブームとしての勢いを失いつつあったBBOYINGは、さらに時代に取り残されていくこととなった。

90年代になると、フジテレビ系で「ダンスダンスダンス」というテレビ番組がスタートし、日本におけるHIPHOPムーブメントは確実にヒートアップを始めた。さらに1991年には「天才たけしの元気が出るTV（日本テレビ系）」で「高校生制服ダンス甲子園」というコーナーが設けられた。これらの番組ではBBOYINGだけでなく様々なジャンルのダンスがテレビに流れた。こうしたことにより、若者たちのダンスに対する認識はより身近なものに、変化していったのであった。そしてこの頃からNEW SCHOOLのダンス（HIPHOP [Freestyle]、HOUSEなど）が流行し始め、BBOYINGはさらに影を潜める存在となった。その理由として、HIPHOPのダンスは真似しやすく、ファッション的にも流行に敏感であったことに比べて、BBOYINGは鍛錬が必要な技が多く、ファッションは動きやすいように常にジャージであったことなどが考えられる。今までのダンサーは、かつて不良といわれ、血の気が多い若者ばかりであったが、テレビ番組で放送されるようになったことで一般の若者もダンスを始めるようになった。ダンスがより大衆のものへと、敷居が低くなった証拠であった。1992年、RSC NY再結成により、一気に日本のクラブシーンも盛り上がりを見せる。1993年ブレイクダンス同好会10周年を記念して、Crazy-Aが川崎クラブチッタでBREAKING NIGHTを開催、日本全国からBBOYが集まった。その後Crazy-AはCRAZY

LEGSからRSCの日本支部（RSC JAPAN）を任せられ、深夜番組オールナイトフジリターンズにBBOYINGのコーナー「YO! BREAKIN」を作り、マスメディアを通じて世に広めた。さらに、ニューヨークからRSCを招き、一気にBBOYING第二黄金期がスタートした。RSCjapanはその後も数々のダンスイベントを手掛け、1998年には東京BBOYS活動15周年をきっかけに、代々木公園にて「BBOY PARK」を開催し、流行により日本では認識の薄かったHIPHOPの正しい形を改めさせたのであった。

その後も「RAVE2001（テレビ東京系）」などのテレビ番組が放送され、2002年にはテレビ番組「めっちゃめっちゃいける（フジテレビ系）」のあるコーナーをきっかけに、BBOYING人気を再度爆発させた。また2004年には「少年チャンプル（日本テレビ系）」というテレビ番組が放送され、ダンスを単なる流行でなく文化として確実に定着させた。

しかし、これらの番組では視聴者にわかりやすいようにBBOYINGのPower moveに“難易度”を定め、体操に近い認識を植えつけてしまったメディアが社会に与える影響というものはこれほどまでに大きいものなのかということが手に取るようにわかる。このメディアをどのように利用していくかで、今後のStreet danceの位置付けもまた変わってくるであろう。しかし、メディアによって今現在BBOYINGに限らずダンスの人気は不動のものとなっているのは事実であり、その結果ダンス人口が増え、お互いが刺激しあい、スキルが進化している。こうした中で日本国内で独自に発展したBBOYINGも、世界から見て目覚ましいレベルにまで進化した。2005年に行われた「Total Session」という世界大会では見事優勝という偉業を成し遂げたのである。その他多くの世界大会でも上位に入り、日本のBBOYINGシーンのレベルの高さを世界に見せつけている。そのためか、現在ではメディアがBBOYINGを中心に取り上げ、Music video・TVCMなどにも多く取り入れられたことで、大衆がBBOYINGを目にすることが多くなり、輸入された1983年当初に比べ身近なものとなった。更に近年には地方でもBBOYINGのスクールが開校され、また文部

科学省により 2011 年よりストリートダンスの義務教育化がなされ、より敷居の低いものとなっている。

『研究の結果と感想』

BBOYING のルーツを掘り起こすとギャングの文化にたどりつき、怖い悪いといったマイナスのイメージをいじめてしまいがちである、しかし BBOYING を作った先駆者たちには、差別や貧困などにより非行や殺人を犯すことが無くなるようにと願いながらこのダンスを築きあげていったことがこの研究から解る。つまり BBOYING とは日本でいう武道のように健全な人格を形成していくための文化なのである。

近年になってアフリカン・バンバーターは HIPHOP には五番目の要素がありそれは「知識」とであると述べている、HIPHOP が誕生してから 60 年が経過し、様々な形に分かれた今、HIPHOP を正しい形で残すには正確な知識が必要不可欠なのだという事である。日本でも 2013 年から小中高で義務教育化されたストリートダンスであるが、ただの動きとしてダンスを伝えるのではなく一つの文化としてその中にあり続ける精神性を伝えていくべきだと思う。

映画 「MENACE II SOCIETY」

Zulu Nation 公式ホームページ

ホームページ [History of HIPHOP]

<http://www.zulunation.com>

映画 「SCRATH」

映画 「The Freshest Kids」 vap Video

映画 「STYLE WARS」 Nomandvd.net

映画 「BREAKIN' COLLECTION SPECIAL FEATURES」

雑誌 DANCEDELIGHT kenswift インタビュー

映画 「WILD STYLE」 Guntez Record

映画 「Flashdance」 Gulf + Western company

ホームページ 「freshtang」